Ⅰ　宗像市の花「カノコユリ」

日本に自生するユリは、１５種類あります。そのひとつにカノコユリがありますが、これを漢字で書くと「鹿の子百合」となります。花びらの内側に、子鹿の背中の柄に似た模様があることから名づけられました。

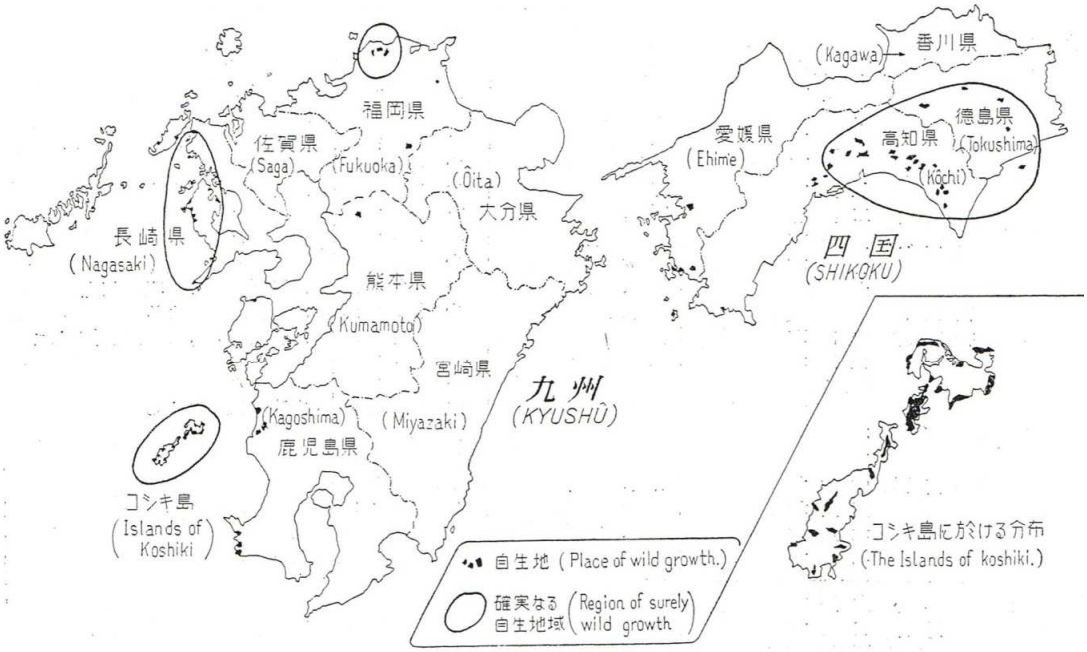
このカノコユリが、昭和５６年に宗像市の花に決められました。

昭和５６年２月に宗像市の樹・市の花の公募が行われました。

市の花は１３６点の応募の中から、選考委員会の協議を経てカノコユリに決められ、４月に施行されました。

カノコユリが選ばれた背景として、宗像市は全国でも珍しいカノコユリの自生地であることが、決定の大きな要因となったようです。

カノコユリは、九州（福岡県・長崎県・鹿児島県）と四国（徳島県・高知県）のごく限られた地域にのみ自生する希少な植物で、今では絶滅が危惧される絶滅危惧種に指定されています。



第１図　本邦におけるカノコユリの自生分布
Distribution of wild plants of *Lilium speciosum* in Japan.

資料：九州農業試験場園芸部のカノコユリ現地調査（１９５３年）報告書

カノコユリが減少した要因は人の活動と関係が大きく、人里の開発や農業の機械化に伴う自然環境の変化によって、カノコユリの好適な環境が維持できなくなってきたことです。

市の花に指定された当時もすでに、自生のカノコユリは急速に減少してきており、宗像で確保し流通できる球根は全くありませんでした。このため、県外（鹿児島県等）から４０００球の球根が導入され、市民に配られた経緯があります。しかし、その大部分はカノコユリに適した場所に植えられていないこともあって枯死し消失して、市民が目にする機会は限られています。

1　宗像市におけるカノコユリの自生状況と普及にむけた取り組み

平成２２年の冬、旧知の谷井博美市長から市の花カノコユリの復活を図りたいので協力してほしいと要請されました。早速、自然環境課と協議を進めるなかで、平成２２年度宗像市市民サービス協働化提案制度によって、むなかた水と緑の会で取り組むこととなりました。

むなかた水と緑の会では、カノコユリが市内のどこにどのように見られるのか情報を集め、開花期の８月に市内で見られるカノコユリの生態調査を行いました。

市内の東西南北、広範な地域で見られましたが、多くは粘土質の土壌の傾斜地に残っており、草刈りなどの手入れが行われていました。

半日陰の急傾斜地の草むらの中に咲くカノコユリ

ツツジの植え込みの下や民家の土手の草むらの中に咲くカノコユリ

また、市民のカノコユリへの認識を高める手段の一つとして、平成２３年度から各コミュニティーセンターに球根とプランター・用土を配布し、花を咲かせて多くの市民に見てもらう活動を始め、平成２６年まで４年間実施しました。

コミュニティーセンターの玄関に置かれたカノコユリ

コミュニティーセンターの敷地の中に植えられたカノコユリ

夏の強い日射や乾燥で葉焼けをおこし枯れ始めたカノコユリ

カノコユリは、夏の強日照下に置かれると、下葉から黄色くなって枯れ始め開花時には葉が少なくなり、茎も枯れてきます。こうなると、球根は大きくなれず枯死してしまいます。

２　宗像固有のカノコユリの探索と保存

平成２２年と２３年には、宗像市の人づくりでまちづくり事業で九州大学・園芸学研究ユニットが、絶滅危惧種カノコユリの保全に関する研究で、宗像市のカノコユリの調査をされました。

平成２３年の夏には、むなかた水と緑の会も一緒に市内の十数か所を回り、生態調査を行いました。

粘土質土壌の傾斜地に咲くカノコユリ

採集されカノコユリの葉を九州大学でＤＮＡ解析した結果、数か所のカノコユリが宗像市由来のものであることが判明しました。

この宗像市由来のカノコユリを宗像固有種と呼ぶこととし、むなかた水と緑の会で固有種の保存、増殖及び普及を図る活動を始めました。

この固有種は全て個人の敷地内にあり、大切に維持されてきていますが、市民が自由に見ることができません。

市民にカノコユリを知ってもらい関心を持ってもらうため、固有種の球根の一部をプランターに植え、市民が自由に見られるように７月～８月の開花期間、市役所とメイトムの玄関に展示しています。

宗像市役所に展示した宗像固有種

株により花色に濃淡がある

宗像固有種の維持は、個人に任せておくだけでなく、後世に残してしていくため市有地に保存園を作り、むなかた水と緑の会で植え込みを行い、草刈り等の維持管理を行っています。

また、近年イノシシの被害がカノコユリにも及んでいることから、被害を防ぐために金網をはり、保護しています。

宗像固有種の保存園への植付（平成２５年３月４日）

保存園での生育状況

草取り直後の状況

開花状況（平成２５年７月２８日）

３　宗像固有種の変異

宗像固有種には、花弁の色が赤色～桃色～淡い桃色～純白と、赤色から白色の間でさまざまな変異が見られます。

固有種には淡い桃色のものも多くみられます

まれに純白のものがみられます

４　固有種の種まき講習

平成２４年から、温度処理を行い発芽した固有種の種子を用いて種まき講習を始め、市民に発芽種子の配布と栽培管理技術の普及を図っています。

また、種まき講習を受講した人を対象としたフォロー講座を、８月の開花時期にあわせ実施し、自生地の見学会と実生苗の管理方法等の研修を行っています。

種まき講習は、毎年場所と回数を増やしており、平成２６年度には市内８か所で１０回の種まき講習を実施しました。

種まき講習の講義の状況

種まき実習

フォロー講座での自生地の見学

宗像固有種のカノコユリの増殖を、庄助村に依頼しています。平成２７年の夏には、生育の良い球根には花が咲き始め、さらにもう一年後の２８年の秋には球根の配布ができるようになります。

庄助村での増殖の状況・ダイオネットを張り遮光

５　カノコユリの好適環境

カノコユリは、生育環境をすごく選びます。適した環境では自然増殖して広がっていきますが、適さない環境下では直ぐに絶えてなります。好適環境の土地に植え、関心を持ち、草刈りや日照調節などほんの少し人が手を加えれば、自生地が広がってゆきます。

カノコユリの花が咲く里づくりのためには、カノコユリに対する正確な知識と維持しようとする意志を持った人の手助けが必要です。

カノコユリ自生地の環境

カノコユリが自生し繁殖しているところの環境を見ると次の通りです。

①　東向きの斜面で雑木が茂り、西日や真上からの太陽光をさえぎっているところ。

②　粘土分の多い土壌で水持ちが良いが、傾斜地で排水が良いところ。

③　家の裏側の斜面や、農道等の横の傾斜地で、時々草刈が行われている。

④　ツツジ等の小灌木が生え、地際に直射光線が当たらないところ。

プランターの置き場所

①　球根が太るためには、１０月頃までは緑色をした葉が多くついていることが重要です。

８月や９月に葉が枯れてしまえば、その後は球根が太らないので、１０月まではできるだけ葉が枯れないように管理しなければなりません。

②　開花時に葉が黄色くなってきていれば、陽の当たり過ぎや乾燥が原因と思われます。夏場はカノコユリにとって日差しが強すぎるので、プランターを午前中は２～３時間陽が当たるが、その後は日陰になる樹木の下や建物の陰等に移動し、強い日差しや乾燥で葉が黄化し落葉しないようにして下さい。

また、土が乾燥しないように株元に藁や枯草、堆肥等を敷くとともに、十分潅水をして下さい。